

優秀賞

ぼくのヒーマン

鹿児島県 伊佐市立大口東小学校二年 中島 魁人

ぼくは、学校でヒーマンをそだてました。毎日本かけをして、大切に大切にそだてました。たべられるくらいに大きくなると、しゅうかくして、いえにもってかえりました。

お母さんがぼくのもってかえってきたヒーマンをつかって、ばんごはんをつくってくれました。ぼくの大すきなケチャップライスです。とてもおいしいうでした。うれしくて、ぼくは自分からおてつだいをしました。

でも、おさらを見たおとうとが、「何これ。ヒーマンいやだ。」

と言って、ヒーマンをぼくのおさらにはいっと入れてきました。ぼくはおこって、

「いにがそだてたヒーマンだぞ。のこすんじゃない。」

とどなりました。心がバリッと音を立ててわれた気が

がしました。

「なんでぼくのヒーマンたべてくれないの。」

ぼくは、かなしくてなき出してしまいました。

それを見たお母さんが、

「あのさ、かいと。だいじにつくったり、そだてたりしたもののをのこされると、どんな気もちになる。」

と、なっているぼくに聞いてきました。ぼくはちょっと考えて、

「かなしくてさみしい。いやな気もち。」

と、そのときの気もちを答えました。

「かいとは、お父さんやお母さんがつくったりょうりをもんく言わずに、のこさずたべたことある。」

ぼくは、ううんとなやみました。

「そのときとおなじだよ。お母さんお父さんもいやな気もちなんだよ。」

と、お母さんが言いました。そのとき、「ごめんなさい」ということばが頭にうかびました。心がちくちくとして、またなみだがこぼれてきました。

ぼくはなきやんで、

「これだけ、たべてほしいな。」

と、ピーマンの小さな切れはしをおとうとのおさら
にのせました。すると、おとうとは、ぱくつとたべ
てくれました。ぼくは、なんだか心がぼかぼかあ
たかくなつて、にこにこえがおになりました。お母
さんは、いつもいろいろなたべものを出してくれま
す。「お母さんも、いつもこんな気もちなのかな」
とぼくは思いました。

ぼくは、魚がきらいです。きらいなりゆうは、魚
くさいからです。きゆうしよくでも、ほとんどたべ
ずに、のこしてしまったこともありました。「きら
いだから、たべたくないや」という気もちがあつた
のです。いえでも、

「なんで。いやだ。」

と言ってぜったいにたべませんでした。

でも、今ぼくは、お母さんやきゆうしよくをつく
つてくれている人の気もちがよく分かります。だから、
これからは、きらいな魚ものこさずたべたいです。

